
人造人間

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人造人間

【Nコード】

N4914N

【作者名】

大輔華子

【あらすじ】

司^{つかさ}牙^さ華は大学院の天文学研究室で二年間の修士課程修了後、中堅企業『株式会社ニユートン』に就職し、研究所へ配属された。その会社はいつたいどんな会社で、何の研究をしているかすらも確認せずに……。

状況判断に限りなく疎^{うと}い牙華。

その中で、彼女は想像もしていなかった事柄を知ることになる。

【華】

【前編】

< 一 >

司^{つかさ}牙^さ華^やはA大学大学院の天文学研究室で天体物理学（Astrophysics）を専攻し、今春二年間の修士課程（博士前期過程）を修了した。

研究室の同期研究生は全員が博士後期過程に進むこととしていたが、牙華だけは突然意志を翻し卒業することにした。

牙華は天体観測が好きでこの道の研究に進んだが、天文学がこれほど物理学的な手法を用いて研究する学問とは思っていなかったのである。もともと数学が大の苦手であった牙華は、この段階で何の未練もなく記号や数式の行列と決別した。

牙華の父は某有名中国電子機器メーカーの董事長兼総経理兼大株主であり、牙華は遊んでいても金にはほとんど困らない家庭環境にあった。

建屋の中には牙華専用の浴場、化粧室、それに専用のシアター。おまけに専門の診療所まであって、牙華は戸外の映画館に行ったこともないし、病院にさえも通ったという記憶がない。

自分自身の予期せぬ行動に事前の就職活動をまったくしていないかった牙華は、『仕事に就ければいいな』程度の感覚で職探しを開始した。

多くの失業した人々が生活をかけて日々職探しをしている世情を考えれば、まったくもってバチがあたりそうな話である。

さらに牙華は実に都合の良いわがままな人間である。

途中で自分勝手に挫折しながらも、今までの研究と全く関係のないことを仕事にしていく気はさらさらなく、自分の今までの研究を活かせる職業以外は考えていなかった。

そんな中、大学院のCPS(Career Placement Service:就職斡旋課)より、冴華のいる天文学研究室に対しちょうどおあつらえ向きの求人があった。

その会社は、従業員が百人ほどの中堅企業で、『株式会社ニュートン』といった。

冴華は、『ニュートン力学』は科学の中でも相当『おおらか』な分野であると考えていたので、こんなに自分にぴったりで楽ができてそうな会社は他にはないと思い、ろくに会社情報や会社案内を確認せず即応募することにした。

冴華は『ニュートン、ニュートン』と口ずさみながら、希望通り中堅企業の『株式会社ニュートン』に就職が内定した。

ところが、その会社は物理のニュートンとはほとんど、いやまったく関係のない、医療用の人工臓器等の開発受託を主とする研究開発会社であった。

過去数年間にわたって毎年その会社から冴華の研究室への求人があったにもかかわらず、一人も応募すらしていないのは、なるほどそういうことだったのか、と冴華は今さらながらにドジな自分を悔やんだ。

数字の式と決別した冴華は、今度は化学記号の式と電子顕微鏡が『お友達』になることになる。すぐに辞めることになるかもしれないと思いつつも、冴華はとりあえずその会社に就職した。

その会社の第一研究所に配属が決定されたのは、冴華を含めやはり今春大学院を卒業した四名であった。

しかし、冴華の二年修士課程修了の『修士』に対し、他の三人はいずれも専門の理化学分野の後期三年もしくは一貫博士課程を修了した『博士』だった。

冴華はこのことになかなり気後れを感じ、やっぱりこの会社は辞めようと思いかけた。

しかし同期入社のリストを再度確認してみてもふと思いとどまった。

……ええ？あの人。まさか？ ……

同じ研究所に配属する者の名は、あいはらのそむ相原望、はまざきちよと浜崎千里、えんどうつかさ遠藤司。

冴華は、かねてから噂に聞いていた『遠藤司』が自分と同じ研究所に配属とわかり、逆に期待に胸膨らませた。

遠藤司……

その男、Z大学理工学部をダントツの首席で卒業後、大学院でも天才と評され、将来を期待されている超大物大学院研究生である。

冴華は自分の姓『司』と彼の名『司』が同じであることに何か運命のようなものを感じていた。

しかも配属が同じ研究所だ。

新入社員男女二名ずつ計四名が第一研究所に初めて集合したその日、冴華は一目でそれとわかる背が高くりりしい感じの男性に緊張しながら声をかけた。

「司冴華と申します。宜しくお願い致します、遠藤さん」

その男性は一瞬怪訝な表情をして見せたが、すぐに事情に納得し
応えた。

「よろしく。ボクは彼ではなくて、相原望といいます。遠藤くんは
そちらの方だと……」

彼が手の平で示したその先には、身長は一四〇センチ代半ばくら
い、牛乳瓶の底を二枚重ねてさらにマジックで渦巻きを書いたよう
な黒ぶち眼鏡を果物のパイナップルに架けたような顔の変な小さな
おじさんが立っていた。

冴華はその変なおじさん越しに、心の中で遠藤司を捜した。

…えっ？ どこどこ？ 遠藤さん。遠藤司さ〜ん〜どこ〜……

目の前にいたその変なおじさんは、いきなり冴華の右手人差し指
をつかみ、自分の鼻のところにもっていった。

「きゃあっ!」

冴華は虚を衝かれて、彼の手を振りきって指を引っ込めた。その
男に咄嗟に指を舐められるか、くわえられると感じたからである。

「オレ。オレ。えんどう。遠藤司」

「えっ？」

まさかそうではないと心で否定していたが、期待は見事に裏切られた。見た目も相当みすばらしくおかしいが、態度のほうもすこぶる異常である。

…自分を指差すのに、普通、他人の『指』を使うかあ?! ……

ところで、相原望は長身のいわゆる『イケメン』で、浜崎千里はスラッと脚の伸びたモデル体型のしかも美形である。気がつくところ人は初対面から仲好さそうに笑顔で話をしている。まさにお似合いの美男美女カップルだ。

対する冴華は、変なおじさん、ではなくて遠藤司と向かい合わせで絶句状態である。

冴華は将来を期待される噂の大物を目の前に、急に力が抜けていくのを感じた。

配属の新入社員四名は研究所長の横に並んで、三十名ほどの所員と向かい合わせになった。所員の方へ自己紹介も含めて新任のご挨拶である。

向かって右側、所長の脇から身長が等間隔に高くなっていったて奇妙な光景だ。

遠藤司・・・一四七cm、司冴華・・・一五八cm、浜崎千里・・・一六九cm、相原望・・・一八〇cm。

自己紹介で、すでに冴華は気後れの極限状態だった。専攻分野も

理化学研究所に完全に畑違いの天文学だ。

「いったい君はこの研究所に何を研究してきたの？　という感じである。」

仮にテーマは無視したとして、研究キャリアや称号だけを比較しても他の三人にはとてもかなわない。

自分の研究テーマを披露すること自体まったく意味がない。

競ってみても初めから勝負がついていると思った冴華は、自己紹介で得意分野は『国語と算数です』とか言っつて、ふざけてウケを狙うしかないと考えていた。

ところが、最初に挨拶した遠藤司に先にボケを越されてしまった。彼は、名も名乗らずに『得意分野は……』と言ったあと、その場でバクチュウ（トンボ返り）をして、得意満面のマッチョポーズを決めたのである。

かなりウケて拍手が広がった。

……ずるいよお！　……

このままだと冴華の考えていた、『国語・算数が得意』ではボケにもならないことが明らかであり、冴華は焦った。悩んだ拳句、彼女はその日、黒のパンツスーツ姿だったので、『得意分野』のところで思い切つて股を割り相撲のしこを踏んで見せ、土俵入りを見事に決めた。

「雲竜型の土俵入りが得意な私です……」

しまった、のせられてしまった、と思つたのはその直後だった。

いや、のせられたのではない。生来のボケを自分から露呈してしまつたのである。

所長以下全員と同期の相原と浜崎の目まで一斉に『点』になっている。

腹を抱えて大笑いしているのは、遠藤司だけである。

「がっはっはっはは。負けた。負けた。このオレが負けた。完敗だ。ははは」

……『コマネチ！』ぐらいにしとくんだった……

いやいや、そうだった問題ではない。

……何でこんなやつとボケを競ってしまったのだろう……

その日は事務所の中の設備の使い方や、決まりごと、電話の取り方などを教わって配属一日目が終わった。四人揃って所員にご挨拶をして一緒に最寄駅まで向かった。

ところが、研究所の門を出たすぐのち、しめし合わせていたかのように、イケメン相原と美形浜崎は『じゃあね……』と言って二人でどこかへ行ってしまった。

……ちよっ、ちよっとやめてよ。それずるくない?! ……

かくして冴華は遠藤司と仲良く二人で駅まで歩くハメになってしまった。

遠藤司は言う。

「ねえねえ。さやちゃん。オレこの会社で一つだけ心配事が有るん

だ
」

冴華はちょっといらっとした。

……なんで、いきなり『さやちゃん』なんだよ。なれなれしいな

……

それでも冴華はその気持ちを決して顔には出さずに言った。

「なあに？遠藤さんでも心配するようなことがあるんだ……」

天才と評される遠藤司に対する尊敬の念、いや、尊敬しなくてはいけないという心理的コンプレックスからかもしれない。

「あのね」

彼は内緒話のように手の平を口のところへ持っていくので、冴華もこれに耳を近づけた。

「何？」

「この会社、組合がないんだってよ」と遠藤司。

「……あの。組合って労働組合のこと？」

「そう……。心配だなあ」と天を仰ぐ遠藤司。

……！！ この男、いったい何を心配してるんだ！ しかも思いっきり内緒話でもないし！……

世の中不景気なわりに、研究所はいつも忙しかった。

人間の臓器の役目を一時的に代替する医療機器に比べ、『人工臓器』はより高価であったが、潜在的ニーズは量り知れないほど大きく、各企業は次世代の先進医療を何とか自社技術として取り込もうと躍起になっており、研究の受託は増えるばかりであった。

仮に技術的にクリアしても、実用化には法整備というさらに厚い壁もあるので、まだまだ先が永いが、各企業とも一発逆転を狙っていることは確かだ。

逆に逆転された企業は大企業でも市場からふるい落とされることにもなりかねない。

患者に少しでも苦痛や負担を与えない先端治療や手術のためのさまざまな器具や機器の開発も盛んでいるが、その水面下では『人工臓器』の開発も深く潜行しながら動いている。

遠藤司は、第一研究所にとって即戦力になり得る資質を充分備えていたが、学術機関の研究と異なり企業の研究所ではサイエンスよりもテクノロジーが優先されることがあるので、先輩役員にとつて彼が邪魔になる場面もしばしば見られた。

頭のいい遠藤司はそれがわかっていても先輩たちの言うことをあまりきかない。

我が道を行く、である。

幾分ノウテンキな冴華であっても、これが研究受託の当社にとってプラスになる筈がないことくらいは感じる事ができた。

冴華は、研究内容には何も口を出せなかったが、いつの間にか女房役のように遠藤司と先輩研究員の間を調整している自分に気づいていた。

これは冴華にとっては、決して好んでやっていることではなく、ただ何となくそうなってしまうているのだ。

研究所の中では、名前をめぐる実にややこしい関係が存在している。

この研究所の所長は遠藤雄二という。

彼は実に常識的で穏やかな気性で、新入社員の遠藤司とは年も相当違うが性格も正反対である。新入社員の遠藤のことを研究所の皆が、『遠藤司』とフルネームで呼ぶのは、所長の遠藤に気をつかっていたことである。

しかし、冴華にとってはこれが逆にうっとうしい。

常に遠藤司と、司冴華がセットのような響きになってしまっている。

冴華はこれが、研究所に配属される前考えていたような運命的なものであるとは考えたくなかったが、何となく遠藤司を放っておけなくなっていた。

人付き合いがあまり得意でない冴華が、同じように不器用で我が道一直線の遠藤司を何とかしてあげたい、と感じるのはある意味同族意識からくるものかもしれない。

そうしているうち、一つの季節の時が流れた。

この研究所にはいわゆる事務員女性なるものは二人のベテラン派遣社員しかいない。女性といえども、本社採用で配属されてくる社員はすべて研究員である。

研究所員の男性は、ほとんどが二十代後半から三十代で、毎年配

属される数名の女性と数年以内に次々と結婚する。

研究所が違つとテーマもがらりと異なるため、結婚した研究者の女性は他の研究所に転勤という選択肢はないに等しく、夫婦同じ職場はあまり具合もよくないので、当然に女性のほうが会社を辞めることになる。

せつかくの優秀な女性研究者が家庭に入つてしまふのは勿体ないと考えられがちだが、『内助の功』という言葉にそのからくりがあった。

妻のほうは会社にはいないが、夫婦互いに同じテーマでの研究者なので、少なくとも子供が生まれるまでは会社と家庭で共同研究のような状態が続く。

こうして会社は一定期間、夫一人分の給料で二人分の頭脳や研究時間を得ることになる。

何も会社は妻にただ働きを強要している訳ではない。相手が勝手にそうしてくれるだけだ。

このため会社は、毎年欠かさず優秀な女性研究者で一定以上の器量を得た女性を即決で採用し、所内は公然と自由恋愛を奨励している。

今年の場合、この研究所では女性が冴華と浜崎の二名だけであったが、美形浜崎は最初から同期のイケメン相原とカップリングしており、この点では会社の思惑はもの見事に外れた。

このからくりは、仕事内容のよく理解した所内の先輩研究者が夫で、新人の女性研究者が妻というパターンでないと成立しない。

仕方がなく、数人の男性からは冴華に目が向けられていたが、どうも冴華にはあのややこしい遠藤司がくつついたままである。

いや冴華のほうからくつついているようにも見えた。

これも会社の思惑の完全な外れだ。

どうも今年の配属担当部門の責任者は、その手腕に鈍りがあるようである。

ある三十代後半の独身男性は冴華を会社帰りに誘って、居酒屋で飲み食いしながら訊いた。

「司さん。遠藤司のこと。あいつのどこがいいの？」

「えっ？ どこがいいって。どこもよくありませんけど」と冴華。

「うそだよ。いつでもくつついて。いったいどんな話してるの？」

その男はほどほどに酔いがまわっている。

「どんな話って。いろいろだけど。」と冴華。

「たとえば？」

「今日は、彼が『半魚人はんぎょじんを見たことある？』って訊くから、ないって言ったら、『実はね、半魚人って半分魚じゃないんだよ』って」

「何の話？」

「だから、半魚人は半分魚じゃなくって、半分イルカだって話。だから『半イルカ人』」

「……よくわからないけど。それから？」

「あと、一九九〇年頃に絶滅した、『オレンジヒキガエル』を彼、家に沢山飼っているんですって」

「また何の話？」

「だから、オレンジヒキガエルの話よ。知らない？ コスタリカ北西部のモンテベルデで最後の一匹が目撃されてから、地球上で絶滅認定されたカエル」

「……よくわからないけど。仕事と関係のある話とかしないの？
彼、とてつもなく優秀だっていうから」

「するわ。この間は彼、勤務中の安全靴のことをさかんに言った」

「またあ。何の話？」

「労災の話よ。材料が重くて、もし足の甲にでも落ちたら危険だつて。安全靴買ってくれないと怖くて仕事できないって言ってたわ。車にひかれてもびくともしないような安全靴。ねえ、その通りよねえ」

「……よくわからないけど。それから？ ……ああ、もういいや。
今日は少し酒がまわりすぎた」

相手の男性は目がうつろだった。

彼は冴華のような、顔は細めだが極端な下半身デブという、妙にアンバランスな女性が好みだという大変珍しい男で、冴華にとっても今回のお付き合いは結婚に向けての大きなチャンスであったが、その男は酔いながら、彼女と付き合うのはとりあえずやめておこうかと考えていた。

男はウイスキーを水のように飲み続け、完全に潰れた。

仕方がないので、その日、冴華は男を店の人に委ね、そのまま店からタクシーを呼んでもらって家まで帰った。

【後編】

<三>

遠藤司は、俗に言われる『マザコン』である。

冴華は、彼と会話をしているとき日に何回も『ママ』という言葉
を耳にする。

『母』とか『おふくろ』ではなく『ママ』である。

冴華より三歳年上の二七歳にもなつて、人に話すときに『ボク
ママ』である。

しかし、冴華はそのことに対してさほど嫌な感覚を持たなかつた。

冴華には実の父も母もない。

児童養護施設時代、彼女が中学三年生の終わりの春に、日本にい
る金持ち中国人夫婦に引き取られその後普通高校へ進学、大学院ま
で卒業させてもらった。

施設時代の記憶は何故だかわからないが全く無いし、実の両親が
何故いないのかもわからない。

だから、冴華は普通の感覚の女性、つまり『マザコン』の男性を
特に嫌うような女性たちとは異なつた感覚を持ったのかもしれない。

冴華は、遠藤司と話していて、『ママが、そう言った』『ママが、
こうしてくれた』という言葉が、だんだんと『ママなら、そう言っ
た』『ママなら、そうしてくれると思う』というふうに変化してい
ることに気づいていた。

そして、そのことはもしかして、彼の母親は既に過去亡くなつた
というふうに聞こえてきた。

それまで冴華は、彼があまりに母親のことばかり話すので、積極

的に母親のことを聞いていたが、そのときから彼に気遣い母親のことを訊くのを少し控えるようにした。

冴華は遠藤司と共に彼の住居に向かっていた。

遠藤司は、学生時代から、自分の住居の中を一切教授や研究室の講師に見せたことがない。

もちろん会社の研究所の先輩についても同様に隠し続けている。外までは来ても、家の中までは絶対に入らせない。

このため、研究所の先輩たちは彼の家の中には宇宙生命体が住んでいて彼の研究を手伝っているだとか、恐竜の卵を温めているだとか、四次元空間があり過去と未来を行ったり来たりしているとか、さまざまな科学者なりの発想で、なおかつ科学者らしからぬ根拠のない想像をたくましくしていた。

しかし彼は、そんないわば秘密の住居の中について、冴華のたった一言、
「あなたの部屋に連れてって」で、「うん。いいよ」と容認したのである。

冴華は遠藤司を『恋愛』の対象として考えることは決してなかったが、何か心に安心感を与えてくれるような気がしていた。その気持ちが遠藤司にも伝わっていたのかもしれない。

遠藤司の連れて行った家はお化け屋敷のような古い洋館だった。

中に入ると、いきなり西洋の鎧よろいがあった。

……まさかこんなところで一人暮らしじゃないよね……

冴華はとても怖かったが、彼の穏やかそうな横顔を見てほっとした。

遠藤司はらせん状の大きな階段の下にある、これまた誰が座るのだろうと思うような大きなソファ―に腰掛けて冴華を手招きした。

冴華が彼の横に少し距離を置いて座ると、彼はいきなり冴華の右手人差し指をつかんで自分の顔の方に引き寄せた。

冴華は瞬間ビクつとしたが、二度目のことで、ははあ、また自分のことを指差すのだな、と思いつ指を引かれるままにした。

次の瞬間、冴華は思わず声を漏らしていた。

「ひいっ！」

冴華の指は遠藤司の口の中にくわえられ、その舌で舐められていたのである。

「やっやめて！」

冴華は必死で指を彼の口から抜こうとするが、彼は左手でがっちりと彼女の手首をつかんで放さない。

そしてまた次の瞬間、遠藤司はあいていた右手をゆっくりと冴華の胸のあたりに伸ばしてきた。

冴華はもう抵抗をやめた。

遠藤司は指をくわえたまま、服の上から冴華の左胸をまさぐった。

冴華は何故抵抗するのをやめたか自分自身不可解だったが、それは遠藤司が一人の男性として冴華を求めているのではなく、子供が母親に求めているような気持ちにさせられたことだと理解した。

遠藤司はそのまま冴華の指の先をくわえたまま、服の上から冴華の胸に頬をあてがい、ちゅうちゅうと指を吸いだした。

牛乳瓶の底を二枚重ねてさらにマジックで渦巻きを書いたような黒ぶち眼鏡はすでにソファーにずり落ち、果物のパイナップルの葉のようなまばらな髪の毛が冴華の首をくすぐった。

冴華は、そのパイナップル頭をあいている左手の手の平で撫で、そのあとその手を自分のブラウスのボタンに持っていった。

右手の指を彼の口からそっと抜く。

いつの間にか冴華は自ら胸をあらわにしていた。

乳が出るわけではない。

しかし冴華の胸の先端は『気の済むまで吸っていいのよ』というふうに精一杯の主張をしているように見えた。

そして遠藤司の頭を抱え、彼に自分の胸を吸わせていた。

遠藤司と司冴華。二人のおかしな関係は続く……

夢中になって冴華の胸に顔を埋める遠藤司。

そのあと二人はしばらく時の経つのを忘れ恍惚のときを経て、ソファーの上で横になった。

冴華はいつの間にかソファで寝ていた。
果たしてどのくらいの時間が経ったのかわからない。

遠藤司に肩を揺らされ目を開いた。

遠藤司の様子は何か変だった。

眼鏡がひん曲がっていて、片方の目が眼鏡にかかっていない。

冴華は思わず吹き出した。

……パイナツプルが例えられて怒りそうな顔だ……

遠藤司は住居の中を案内すると言った。

最初に入った部屋は、大きな部屋で実物大のイルカのはく製がずらりと並んでいた。

これはすごいと思っていたが、順に見ながら奥の方へ進んでいくと、途中からイルカのはく製からは『足』が生えていた。

しかも、その『足』は明らかにどこかのデパートで拝借してきたようなマネキンの足だった。

「これが半イルカ人のはく製だ」

遠藤司は胸を張って言った。

「……………」

「彼らは超音波で交信していると考えられているが、実はそうではないんだよ」

冴華はもう何も言えなくなってきた。

「ふふふふ。驚くなよ。植物が『フィトンチッド』を発している」とは君知ってるよねえ」

「はい。知ってますけど」

「ここに標本としている彼らは動物だが、実はね。実はね……」と遠藤司。

「何なの？」と冴華。

「彼らは実はフィトンチッドを発しているのだ!!」と遠藤司。

冴華は、これまでかなり彼の会話に適応していたつもりであったが、さすがにデパートのマネキンの足をした半イルカ人が、植物の発するフィトンチッドを発しているという事実を共有することはできなかった。

「あの。はい、その。何て言ったらいいのか……。わっ、わかりました」

「いーーーーーんや。ぜんぜんわかってない!」と遠藤司。

次に冴華が案内された部屋は、大小のカエルが飛び交う、とても中に入れそうにない部屋だった。

冴華はいやな予感がした。

「あのう。もしかして。絶滅認定されたオレンジヒキガエルですか？」

ところが、大きなウシガエルの間に、金色に光る体長五センチくらいのカエルがあちこちに見えた。

今度ははく製ではない。

子供のお風呂のおもちゃでもない。

間違いなく生きている。

しかも一匹や二匹どころではない。

見えるだけでも十数匹を超える。

……ええっ？あれ、もしかしてオレンジヒキガエルだ！ 間違い
ない！ すごーい。遠藤司！！ やったああ！！……

冴華は感激し、これまで生きていて良かったと思った。

しかし、その内の一匹が冴華の足元に跳ねてきて気持ちが少し揺らいだ。

色がはげて緑色の皮膚がところどころ見えている……。

冴華はそのカエルを指差して言った。

「あの。このカエル。色、変じゃありません？ 『地』の色、みどりなんですけど」

それでも遠藤司は全く動じない。

「絶滅したと思われていた矢先、一九六六年に本種を発見した学者は何と言ったと思う？ 有名な話だ。『白状するが、最初に見たときに頭に浮かんだのは、不審の念と誰かが標本をエナメル塗料の中に落としたんじゃないかという疑いだ』と感激しながら述べている。とかく発見とはそうしたものだ。ははは」

遠藤司は胸を張りそう言った。

冴華はこれを聞いてなおはっきりと確信した。

「……でも、ごめんなさい。私、不審の念以外何も感じない。だつてこれ。その辺にフツーいるアマガエルだもん……」

そこから異様な展開だった。

さらに奥の部屋には研究所の遠藤所長がいた。

冴華はいるはずのない所長の姿に絶句し、完全に混乱した。

「……所長がどうしてここに……」

「……『遠藤所長。何ですか？ どうしてここにいらっしゃるんですか？』……」

冴華はそう言おうと思ったが、言葉にならなかった。

遠藤所長は言った。

「冴華くん。君は遠藤司の趣味の凄さに感心している場合ではない」

冴華は気が動転しながらも、即座に心の中で思った。

……別に全然感心してないから！ ……

そしてさらに所長は言った。

「君を待っていた。司と三人でまた一緒に暮すのだ」

「司と三人でって、どういうことですか？ どの司ですか？」と冴華。

「つかさとつかしゃと私だ」

冴華はますます意味がわからなくなってきた。

とても今の状況を理解することができない。

だいいち肝心のところでセリフを噛んでしまっているにもかかわらず、所長は何食わぬ顔をしている。

このままだと、とても埒らちがあかないので、冴華は所長にお願いしてみた。

「あの……。もう一度、お応えお願いしてもらっていいですか？」

遠藤所長はゆっくりと頷いた。

「つかさとつかさとわたししゃだ」

……わっ、わたししゃ?! 普通、そこ噛むかあ? ……

遠藤所長は固まっている冴華に駆け寄って彼女を突然抱きしめた。

……どうして? やめてください! お願いやめて、ああ所長……

……あなたは決してそんな人じゃない。私の中では……

冴華にはやっぱり意味がわからない。

所長は冴華の背中に手をまわして『ぎゅーっ』と押した。

……気持ちいい……

……ものすごく気持ちいい……

……ああ……

……死にそうに気持ちいい。もう、死んでもいいほど気持ちいい

……

所長は冴華の耳元でささやいた。

「君は、私が今からちょうど九年前、君を高校一年生として創った
『人造人間』なんだ！」

冴華は急に現実に戻された。
いや、逆に空想の世界に放り出されたのかもしれない。

「じつ、人造人間って？何、何？」

「君の体は私が造ったものだ。いろいろこだわっていたら、下半身
が少し大きくなりすぎた」

「ぶぶっ！ 大きなお世話よ。失礼ね！ ああ、そうじゃあなくて
むうっつ。ウソ！ 私は人間よ！ ちゃんと自分の意志もあるし！」

いくら所長だって、そんな悪趣味な冗談許せないわよ!!」

所長の目からは涙が流れだしてきた。

「そう。君は人間だ。人間なんだ。レッキとした」

「君の『脳』は私の、私の愛する妻の！司の母の……」

「君の頭の中には、そのときに死んでしまった妻の『ウメ』の『脳』が
生きているのだ……」

……うっ、ウメ？ 知らない。それっていつの時代の人？ まさか、おウメさんとか言わないで……

「そんなの、いやあーっ!」

背中の中回りの『ぎゅーっ』の快感から何か記憶らしいものが頭に浮かんできた。

<四>

記憶の中の私。

ピクニックセンターの入口。

入場券売り場は大変な行列である。

子供がいる。

「つかさ。バラ園が見えるよ。ちょっと待っててね」と私。

「パパ。つかさが迷子にならないようにちょっと見ていて」

「わかったよ」と夫。

「つかさの手を離しちゃだめよ」

「わかってる」

東京デイズニールランドの入口。

夫が「つかさ。どこから行こうか」

「あれがいいよ」とスプラッシュユマウンテンを指差すつかさ。

私が「全部ぐるっと回って予約してくる。あとで並ばないで済むからね」

夫が「じゃあオレはつかさと待っていていい？ それとも一緒に行こうか？」

「大丈夫。待ってて。一人の方が早いから」と私。

そして、次はシーワールドホテルの前。

大きなシャチのモニュメント。

はしゃぐつかさ。

「行くぞう。つかさ！」と夫。

「行く行く！」とつかさ。

つかさの高校の卒業式。

つかさは首席で卒業生代表。

憧れのZ大学理工学部に学校でただ一人合格

そして背の低さでも男子一番。

視力は〇・〇〇〇〇・一。

なんでも一番のつかさ。

みんなにぼんぼんと頭たたかれる。

男子にも、女子にも。

うれしそうにつかさ。

見ていた私は、隣の夫と顔を見合わせてにっこり微笑む。

それから、それから。今の私の最後の記憶……。

私は病院のベットの上。

もう、白血病の末期。

みんな隠してるけど、私は全部知っているの。

みんな泣いている。
私のベッドの回りで。

その瞬間記憶がとだえた。

<五>

ここは懐かしい家の中。
古い洋館の奥の部屋。

気がついたら、夫の遠藤雄二が目の前に立っている。
夫の頭はもう白髪混じり。

どうしたの？あなた。
私は死んだのではなかったの？

振り向くと後ろには我が息子、遠藤司がいる。
彼はもう、いつのまにか立派な大人。
でも目が悪いのは昔から同じ。
パイナップルみたいな頭も……。

……どうして？ 私は生きている？ ……

「ママ、ママ！！ ボクだよ！！ つかさ、つかさ」
すっかり大人になった息子、遠藤司が叫んでいた……。

遠藤ウメ、いえ司冴華。どっちだ！
本当に、わけがわからない。
でも、どっちでもいい。

どっちの記憶も今の私の中にある。
少し心落ち着かせると、記憶は決してだぶってはいない。
意味がわからないが、大丈夫。いえ、大丈夫でなければいけない
ような気がした。

彼女は息子の遠藤司を抱き寄せ、共に生きている感触を確かめた。

<六>

避暑地の高原教会の礼拝堂では、挙式が執り行われていた。

神父さんの前には、初老の新郎と年の離れた下半身デブの……失
礼、もとい、若くそれなりに美しい花嫁。

親族・参列者席の一目には、牛乳瓶の底を二枚重ねてさらにマ
ジックで渦巻きを書いたような黒ぶち眼鏡を果物のパイナップルに
架けたような顔のチビ……失礼、もとい、小さな男。

その後ろには、新婦の里親である中国人の夫妻と診療所のドクタ
ーの三人。

式を終えて新郎新婦を四人が囲み、六人で写真撮影。

ライスシャワーのあと、新郎新婦がウエディングベルを鳴らす。

第一研究所に遠藤所長からの結婚式の写真がメールで届くなり、
所員は皆一様に驚いて顔を見合わせた。

所長のメッセージ。

件名：お騒がせの雄二より

本文：結婚しちゃったヨーン（*^m^*） 冴華クンと。し

ばらく遠藤司と三人で新婚旅行。みんなしつかりがんばってケンキ
ユウしてネ！

「……………」

「……………」

所員の男性研究員の一人がつぶやいた。

「おい。所長、完全にキャラ代わってるぞ。顔文字入ってるし！」

「これはルール違反だよなあ。所長が遠藤司のカノジョ奪い取って、
とうとう結婚しちゃったよ」

そして別な男性研究員は言った。

「オレ。遠藤司が式場から新婚旅行まで押しかけていく気持ち、何
となくわかるなあ」

「ほんとに……」と女性研究員。

「あいつ、冴華にべた惚れだったもんなあ」

「いいえ。惚れてたっていうより、何だかずっと会いたかった人に
やっとめぐり合えたって感じだったわ」

送られてきた集合写真の中には、牛乳瓶の底のような眼鏡でよく
目は見えないが、満面に笑みをたたえる遠藤司の顔があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4914n/>

人造人間

2010年10月9日19時15分発行